

現代の

ことば

おおうら
大浦 康介
やすすけ



「遠くを見よ」と題された文章を中学生のときに読んだ記憶がある。といつても覚えているのは「遠くを見よ」という言葉だけである。私はこれを「目先のことに囚われるな」、「遠い未来を見ずして生きよ」ぐらいの意味に解し、漠然とながら一種の指針として心にとどめてきた。

「憂鬱そうにしている人に言えることはひとつ。遠くを見よ」で始まるこの断章でアランが語っているのは、むしろ空間的な「遠さ」である。本ばかり読んでいないで、夜空の星や水平線に目を向けよ、そうすれば心身ともにくつろいだ状態になるとアランは説く。「自分のことを考えるな、遠くを見よ」ともあるように、これは我執への戒め、自然体で生きることの勧めでもあった。

「遠くを見よ」は正しいか

つばら「遠い未来を見よ」という時間的な意味で勝手に理解していたというわけである。しかし私がここで問題にしたいのはそのことではない。青年期の記憶などいいかげんなものだ。私が問題にしたいのは、アランの論旨とは関係なく私のなかでひとり歩きを始めたこの言葉の真実について、私が抱くようになった疑念である。

あまり遠くを見てはいけない場合もある。私は後年しばしばそう思うようになった。たとえば禁煙しようとする場合がそうである（例が適切かどうかは分からないが）。このさき何十年も煙草が吸えないと思うと、禁煙の決心はゆらぐ。とりあえず今日一日は吸わないでおこうと決めて、実行し（それはさほど

難しいことではない）、それを二日、三日と積み重ねてゆくことで、結果的に長期の禁煙が達成される（とよく言われる）。禁煙したい者「遠くを見るべからず」なのである。禁煙をタイエットと置き換えてもいいたろう。

結婚しようとする場合もそうである（結婚を禁煙と比べてはいけないのかもしれないが）。「このさき一生この人と……」などと考えると、なかなか結婚には踏み切れないものだ。結婚生活はおよそ50年、つまりこれまで生きてきた人生の倍ぐらい続くのだと考えると尻込みする若者がいても不思議ではない。ここでも「二年一年」（「一日一日」とまでは言わないが）がほどよい目安となるはずだ。

結婚したい者もやはり「遠くを見るべからず」なのである（ただ、離婚率がここまで上がった今日、結婚を一生事と考える若者がどれだけいるかは疑問だが）。

では一般的にいつて、どんなときに「遠くを見るな」なのだろうか。私にはつきりした答えがあるわけではないが、持続や忍耐が試される時、またそうした試練を前にして自分に自信がもてないとき、そんなときはあまり遠くを見ない方がいいようである。それはかっこよくはないかもしれないが、目的達成のための堅実なやり方である。「身のほどを知る」とはこういうことをいうのかもしれない。（京都大人文学研究所教授、フランス文学・文学理論）